日本社会心理学会会報

224 号

発行　日本社会心理学会　http://www.socialpsychology.jp/
編集・制作　広報委員会（担当常任理事：藤島喜嗣）

2020 年 9 月 29 日

日本社会心理学会第 61 回大会へのお誘い

外山みどり

今年も秋がやってきました。毎年この時期には、その年度の社会心理学会大会についてのご案内と参加のお誘いが、会報に掲載されるのが慣例となっているようです。そのような文章の中では、プログラムについての案内と共に、「どうぞ○○大学へお越しください。お待ちしております」というような表現がよく見られますが、残念ながら、今年はそのような文言を用いることができません。

日本社会心理学会第61回大会は、11月7日（土）と8日（日）に開催の予定で、その準備を学習院大学が担当しておりますが、今年度は大学のキャンパス内ではなく、Web 上で開催することとなりました。新型コロナウイルスの感染拡大は、今年の 2 月頃から、社会のさまざまな方面に影響を及ぼすようになりましたが、大学も卒業式・入学式の中止、その後の休講を経て、5 月の連休前後から遠隔授業を開始したところがほとんどであったと思われます。学生は大学構内に立ち入れず、教員は慣れない形式の授業に苦労し、研究面でも多大な困難が生じました。国内の心理学関係の学会でも、春開催のものから次々に中止、延期、開催方法の変更が発表されるようになりました。社会心理学会の今年度の会期は比較的遅い 11 月でしたので、当初は、通常開催が可能ではないかという楽観的な見方もありましたが、例年の学会会場での混雑と熱気を考えると、ふさわしい場所を探すことは不可能であろうと思われました。

しかし、このような困難な時期にあっても、あるいは困難な時期であるからこそ、会員が自らの研究を発表し、意見や情報の交換の場をもつことは極めて重要なことであり、その機会を提供することは学会の使命であると考えました。また今年度のうちに発表、公開することに価値がある研究も多々あるのではないかと推測されます。そこで大会準備委員会では、研究発表を Web 形式で行うことを中心として大会開催を計画するという方針を固めました。Web 上での発表では、単に発表論文集の原稿を出して頂くだけではなく、通常の学会発表にできるだけ近づけるように、スライドやポスターに匹敵する発表資料をアップしていただき、他の参加者がそれを閲覧して、質疑応答ができるようにする方式を目指すことにしました。このような決定をしたのが 5 月中旬、常任理事会の承認を得て、業務委託をしている国際文献社にシステム改修と見積りの再提出を依頼したのが、5 月下旬～6 月上旬であったと思います。何しろ今までに経験のない方式ですので、国際文献社にも多大なご苦労をおかけしましたし、また参加人数などの予測が難しく、準備委員会もいろいろと苦慮致しました。そのために、61 回大会のウェブサイトの開設と第 1 号通信の公開が予定より大幅に遅れ、会員の皆さまにご心配とご迷惑をおかけしたことと思います。心からお詫び致します。

学会場で実際に人に会い、会話を交わす楽しみがない Web 形式の大会にどの程度の参加者があるのか、またデータ収集にも困難をきたす状況で、どのくらいの発表数が見込めるのか懸念しておりましたが、発表数は過去 2 年の 7 割程度ではあるものの、230 件を超えており、一応安堵しております。参加者については、通常のような「当日参加」が設定できず、予約のみになりますが、10 月 23 日（金）まで受け付けておりますので、是非ご参加くださいますようお願い致します。

本大会の内容に関しては、現在作成中のプログラムをご参照いただきたいと思いますが、Web 上での研究発表とそれに対する質疑応答、オンラインで開催されます会員企画のワークショップ、そのほかに大会準備委員会企画のシンポジウムを1つ、これもオンラインで開催致します。また総会も 1 日目にオンラインで行われます。シンポジウムに関しては、当初考えておりました、いわば平時のテーマを変更し、新型コロナウイルス拡大の状況に対応する今日的な課題に関してテーマを設定することに致しました。ご自身でも関連した研究をなさっており、優れた識見をお持ちの先生方にパネリストとしてご登壇いただき、議論していただきたいと思っております。どうぞご期待ください。

学習院大学のキャンパスで、皆さまと直接お目にかかれないことは大変残念ではありますが、この新しい形式の大会から、従来とはまた異なった種類の成果が得られますよう願っております。

なお、現地開催でもないのにほとんど無意味とも思いましたが、当初、口頭発表の会場として予定しておりました学習院大学中央教育研究棟の写真を添付致します。

（とやま みどり・学習院大学）

夏の Web セミナー参加記

2020 年 8 月 21 日に、日本社会心理学会としては初めてとなる Web セミナー「Web を利用した調査や実験で何ができるのか？―その応用可能性と限界を考える」が開催されました。非常に多くの方が参加し大盛況でした。当日参加されたお二人の会員に様子を伺うとともに、企画、運営をされた学会活動委員会に裏話をお伝えいただきます。

夏の Web セミナー「Web を利用した調査や実験で何ができるのか？」参加記

竹部　成崇

私は昨年の 4 月から現在の大学に勤め始めたのですが、所属大学の研究倫理審査では、担当授業の受講生を対象に研究参加者募集をすることが認められていません。ソナシステムなどを利用すれば、そこで参加者募集ができるため、この問題は解決するのですが、所属学部に心理学が専門の教員は私一人しかいないため、それもなかなか難しい状況です。そのため、昨年 1 年間を通じて、「ここで研究を続けていくには、オンラインで一般の方を対象にデータ収集するしかないかなぁ…」と考えていました。しかし、そのようなことをした経験はないし、そもそもオンラインで何がどこまでできるのかもよくわかっていませんでした。このような背景から今回のセミナーに参加しました。

当日のセミナーでは、まずクロスマーケティング社の方が、自社で実施可能な調査やモニター管理の方法などについてご説明くださりました。また、不良回答に対する報酬、外国パネルの質、回答に応じた報酬変化の可否など、実際に依頼する段階で気になるであろう問題についても真摯にご回答くださりました。その中で出てきた、モニターのお子様に回答してもらうことも可能とのお話には、少し驚きました。未成年の方のデータを取得したいけれど、つてもないし、同意取得に関する問題が厄介だと思っていた研究者にとっては、1 つの解決策になりうるのかもしれないなと思いました。

次に久留米大学の浅野先生が、「調査会社に Web 調査を委託する：縦断ペアデータの収集」と題して、調査会社を通して縦断ペアデータを収集した際の経験談をお話しくださりました。ペアデータの収集方法についてはほぼ無知であったため、オンラインで夫と妻から別個にデータ収集することができることに、まず驚きました。やはり、片方が 2 人分回答していると思われるケースや、不良回答かどうか判断に迷いそうなケースもあったようですが、データ全体の信頼性を損なうほど多かったわけではなく、また、判断に迷う場合は調査会社も協力して検討してくれたとのことで、オンラインで縦断ペアデータを取得することも十分可能だということが感じられました。

その後、北星学園大学のトムソン先生が「Facebook 広告を利用した多国調査参加者募集の課題と可能性」について、ご自身の研究を基にお話しくださりました。調査会社に委託する場合と比較して安価にデータ収集できることはなんとなく知っていましたが、具体的な金額差を聞いて、改めて魅力を感じました。ただ、「内的モチベーション」のみで参加してもらうために行った工夫や、昨今の広告費の変化のお話も聞き、「これはなかなか敷居が高い方法だな…」と感じたというのが正直な感想でした。それでもやはり、こういった工夫によって、数千万円といった単位のお金がなくても、様々な国の方を対象に自分の聞きたいことを聞けるというのは、画期的だと感じました。

続いて、同じく北星学園大学の眞嶋先生が「クラウドソーシングを使ったオンライン実験・調査：MTurk は研究のありようをどう変えたのか」と題して、日本のクラウドソーシングの現状、クラウドソーシングのメリット・デメリット、クラウドソーシングとセットで必要になる実験・調査環境の実装ツール、クラウドソーシング利用にまつわる問題などについて、お話しくださりました。個人的には、クラウドソーシングを利用してオンライン実験ができるようになることが近々の課題かなと思っていたので、とても勉強になりました。

最後にLINEリサーチの方が、自社のモニターやツールの特徴、メッセンジャーならではの特性を生かしたデータ収集方法についてご説明くださりました。特に、モニターの代表性の高さには「さすが LINE だ…」と感服しました。また、「調査慣れ」していないモニターが多い点も非常に魅力的だと感じました。代表性の高いサンプルから母集団について推定したい場合などはかなり有用になるのかもしれないな、と思いました。

Web を利用した調査や実験を実際に自分で円滑に遂行できるようになるにはまだまだ勉強と経験が必要そうですが、私のようなビギナーにもなれていない者には、その足掛かりとなる貴重な機会でした。ご登壇くださった方々、企画くださった学会活動委員会の先生方に、心よりお礼申し上げます。

（たけべ　まさたか・大妻女子大学）

「Web を利用した調査や実験で何ができるのか?―その応用可能性と限界を考える」参加記

李受珉

2020 年 8 月 21 日（金），「Web を利用した調査や実験で何ができるのか?―その応用可能性と限界を考える」のセミナーに参加させていただきました。新型コロナの影響の長期化によりこれまでのような対面での調査や実験が難しくなり，思い悩んでいる方も多いと思います。私もそのような悩みを抱えており，そうした際にこのセミナーを目にし，興味を惹かれました。

セミナーでは，クロスマーケティングや LINE リサーチによるどのような調査や実験が可能なのかに関する発表に加えて，Web での調査や実験を実施された 3 名の先生方から Web 調査や実験を実施する際の注意点や得られた結果に関する講演がありました。

Web 調査会社からの発表は，主に学術調査の利用状況，調査依頼から実施までの流れについての内容でした。質疑応答によりクロスマーケティング社で管理するモニターの特徴，モニターの貸し出しの有無，調査目的によっては重要な変数となり得るセンシティブな質問項目への対応などこれからWeb調査を行う研究者に役立つ話を聞くことができました。また，LINE リサーチではスマホメッセンジャーという特性を活かし LINE ユーザーの生活に密着した，よりリアルな調査サービス（e.g.，今の気分は？今何見てる？といった質問に対してチャットや写真で回答する）が利用できるという内容も興味深い話でした。

浅野先生からは，Web 調査会社を通じた 3 時点の縦断ペアデータの収集およびその分析結果について発表していただきました。縦断ペアデータの収集は，ペアそれぞれにどのような形で調査を依頼するかという配信に関する問題やペア間で同じ人が回答する，またはペア間の回答が逆になるという問題もあるため，データ収集前から調査後まで工夫が必要であるという話もあり，Web で縦断ペアデータを収集することの難しさや気をつけるべき点が明確になりました。こうした内容は，私自身が今から行おうとしている縦断ペアデータの収集・分析に大変参考になるものでした。

トムソン先生からは，Facebook の広告を通じた多国調査に関する発表をしていただきました。実例のデータを用いながら，各国における広告クリック率や回答率の差，性別の割合，コストパフォーマンスなどを説明していただきました。広告という性質上，利用者の興味を惹きつけるためには，一般的なアンケート調査ではそれほど重要視されないグラフィックデザインの工夫なども必要になりますが，多国調査を行う上での全体的な傾向を掴むためには，Facebook の広告を活用することも効果的だと感じました。

眞嶋先生からはクラウドソーシングを使ったオンライン調査や実験について発表していただきました。クラウドソーシングとは何かから，クラウドソーシングを用いることのメリットとデメリット，クラウドソーシングを利用する上での課題についてまでわかり易く解説していただきました。

セミナーを通して，様々な観点からオンラインでの調査・実験研究について貴重な発表をしていただき，より一層理解を深めることができました。オンラインでの調査や実験は，データの収集がスピーディーに，楽にできるという利点があります。一方で，データを収集するためのプログラム作成やデータの保護方法について，時間・経済的余裕がどれくらいあるかという観点から考えることが求められ，その点で労力が必要です。そのため，世の中に存在する多くのオンライン研究のプラットホームの中で，何をどのように自分の研究で活用するかは精査していく必要があると思います。オンライン調査・実験を私自身の研究にどのように活用していくかは，悩むこともいろいろありますが，これまでとは異なった手法を用いることで，研究の幅の拡張や面白いことが見つかる可能性にワクワクもしています。

最後に，本セミナーを開催するにあたり，企画・運営していただいた学会活動関係者，そして講師の先生方々に心より感謝を申し上げます。

（い　すみん・広島大学大学院教育学研究科）

日本社会心理学会　夏の Web セミナー　裏方備忘録

学会活動委員会　西村太志

去る 2020/8/21（金）13 時～17 時に日本社会心理学会夏の Web セミナー「Web を利用した調査や実験で何ができるのか？―その応用可能性と限界を考える」を開催しました。開催中止となった春の方法論セミナーからの流れで、学会活動委員会の一員として裏方作業を行いました。このたび、広報委員会より今後の実施のことも踏まえて会報への執筆依頼を受けましたので、記録と記憶をたどりながらまとめます。

まず、新型コロナウイルス感染症の影響で、2020 年 3 月の春の方法論セミナーの開催について、2 月上旬から実施が可能かどうかという議論と検討が始まりました。大規模なイベント（コンサートなど）が中止や延期決定が出始める頃でした。そのため、会場で予定通り開催することはかなり困難だろうとまずは判断しました。その上で会場の明治学院大学をそのまま使用させていただき無観客でのライブ配信という案がでました。しかしながら、例年のセミナーでの会場の同時配信は技術的な課題もあり、十分な画質や音質、通信環境が確保できない可能性があることも議論し、動

画配信スタジオなどを借りて行うことも候補に挙がりました。しかしながら、最終的には常任理事会で中止決定がなされ、いったんはこれらのアイディアはお蔵入りとなりました。

その後 5 月下旬に、学会活動委員会担当の金政常任理事より、「常任理事会より夏に何か web 研究会のようなことの実施検討依頼」があった旨、学会活動委員会に伝えられました。この頃には、各大学でもオンラインでの講義などが一般的となり、我々学会活動委員もオンラインツールについての多少の知識と経験を持つようになりました。また、各種研究会がオンラインで開催されはじめ（会報 223 号　藤島先生記事参照）、様々な学会が秋以降はオンラインで開催されることがアナウンスされはじめました。そこで、web でセミナーを実施する方向で、実施に当たる課題や問題点の検討に入りました。

まず、春のセミナーの内容をスライドさせて実施する方向性が決まり、登壇予定だった先生方や企業担当の方に連絡を取り始めました。多少の修正を施し、登壇者のスケジュール調整を行って、8／21 午後の開催については早めに内定しました。

次にどのツールを使うかの検討に入りました。委員がオペレーションを行うため、慣れているツールがよいだろうということで、Zoom が候補となりました。Zoom は筆者を含む委員それぞれの所属大学でも契約しているのですが、ライセンスの形態が異なるため、今回はこのイベント用に個人の基本有料アカウント契約を行い、ウェビナーのオプション 500 人をつけました。一ヶ月単位で可能なため、このイベント用にアカウントを設定しました。当初 Zoom のミーティング形式（参加者全員が相互の参加者を確認できる形式）での実施も考えましたが、発表者と閲覧者の役割が講義のように混ざることはセミナーでは無いので、ウェビナー契約としました。ウェビナーを用いることで、以下のような点に対応することができました。(1)パネリスト（発表者）とホスト（この両者はカメラやマイクを自らの操作で利用可能）を複数名設定できる。(2)Zoom の標準機能で、参加登録の管理が容易である（参加登録をされた方のみに自動的に参加の URL が発行される。当日はそれをクリックしていることで、どなたが参加されたかは記録される）。(3)参加者側のマイクとカメラはオフが基本となるので、多くの方が参加された場合に生じやすい音声や画像の問題（例：突然誰かのマイクがオンになりその人の生活音が入り込むなど）を回避できる。(4)参加者から口頭で質問をしたい場合などは、ホスト側でその人のマイクをオンにできる。(5)チャットのオン・オフ設定が可能なため（これはミーティングでもできます）、今回チャット機能はオフとした（参加者が質問する場合はチャット機能の方が慣れていて資料の配信もチャット機能を使えばやりやすいが、参加者からの質問の管理が難しくなるため、オフにしました）。(6)質問は Q&A 機能で管理しました。Q&A 機能を使えば、質問の内容についてどのような対応をしたか（口頭で回答したか、テキストで回答したか、却下したか）をホスト側で管理し、保存ができます。なおここでの却下は、質問内容が不適なためなどというより、「ありがとうございました」といったお礼などへの対応です。ほとんどの質問については、口頭もしくはテキストで対応できました。(7)Zoom の機能でリマインダーメール（開始 1 時間前に設定）およびフォローアップメール（翌日に設定）も自動配信しました。これらのメールには、配布資料等の URL も追加し、資料の配付ツールとしても用いました。(8)ウェビナー終了後に、アンケート表示画面を出す機能があるため、事前に委員で Office365Forms を使ってアンケートを作成し、終了後にすぐにアンケートを依頼できるようにしました。

実際のウェビナーの操作については、ぶっつけ本番は怖いので、リハーサルを委員で行いました。その際には、いろいろな役割（登壇者、ホスト、視聴者）を交代で経験し、実際にどのような形で見えるのかなどを確認しました。

リハーサルを行い、ウェビナーの案内を学会 HP やメールニュースで行いました。メールニュースが 8/7 の 02:00 ごろに流れました。早速登録があり、10:00 の時点ですでに 70 人の参加登録があり、20:00 時点では 140 人登録となりました。500 人が定員なので、もし超えたらどうしよう、というやりとりも行いました。ただ、その後登録は落ち着きました。最終的には 377 人の登録となりました。当日の参加者数は 340 人（会員 194 人、非会員 146 人）、同時ビューの最大数は 311 人でした。なお、登録数がオーバーの場合、YouTube ライブでの配信設定もあったので、その利用も考えましたが実施する必要はありませんでした。

当日学会活動委員はホスト（共同ホスト）役で参加しましたが、ホスト内でのやりとりはZoomウェビナー上ではできませんでした。そこで、普段から情報共有に使っていた slack を使い、裏側で時間管理や進行の調整のやりとりを行っていました。登壇者の方はどうしても発表に熱が入り時間がわかりにくいため、残り時間のアナウンスも必要となりました。そのため、当日裏側のやりとりで担当を決めて、横から声を出す形で対応となりました。また、実際の開始時間より前に最終確認の練習セッションを行い、登壇者との最終確認を行っています。質疑応答については、進行役が質問内容の読み上げをして登壇者の方に尋ねる形をとりました。ご自身で質問を拾ってもらうのは、時間の調整の点からも負荷が大きいと判断したからです。また、Q&A 機能は上述のように回答完了などのフラグをつけることができるので、その作業は裏方の学会活動委員で当日臨機応変に手分けをしました。今回 7 人の学会活動委員で当日もいろいろな作業の分担をしましたが、進行役や裏方調整役が全くいないと、セミナーを開いても円滑な進行が難しいだろうなと実感しました。

終了後のアンケートには、進行や運営についてのお褒めの言葉も多くありました。委員を代表してお礼申し上げます。進行に際しては、時間の管理を重視しました。時間配分を事前に告知していたため、その時間にあわせて入ってくる人もいるだろうと考えたからです。また、アンケートには、終了後に登壇者と交流する機会がほしい旨の記載がいくつかありました。確かに通常のセミナーですと、終わった後の名刺交換や感想交流が自然発生的に起こります。今回はウェビナーを閉じないとアンケートが表示できないこともあり、すぐに終了としました。また、ウェビナーでは視聴者からの発話やカメラオンはできません。これらの点は別枠でアフター交流会を設定することで解決可能かと思いました。

今後、このようなウェブセミナーはより頻繁に行われると思います。試行錯誤を繰り返しながらとなると思いますが、大規模/小規模問わずウェブ上での交流も通して研究活動がより活発になることを期待します。

（にしむら　たかし・広島国際大学）

会員異動（2020 年 7 月 21 日～2020 年 9 月 24 日）

入会

《正会員》

・一般　木村　幸生（日本赤十字広島看護大学看護学部）、錢　琨（九州大学持続可能な社会のための決断科学センター助教）、田中　理菜（株式会社日立コンサルティングコンサルタント）

・大学院生　上原　秀斗（九州大学大学院人間環境学府行動システム専攻心理学コース）、小村　佳代（関西大学社会安全研究科防災・減災専攻）、川原　瞳（東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻社会心理学専門分野）、齋藤　治道（千葉大学人文公共学府基盤文化コース）、中村　昌弘（名古屋大学大学院情報学研究科）、野間　紘久（広島大学大学院人間社会科学研究科）、原　惇一郎（東京大学大学院人文社会系研究科唐沢研究室）、保坂　太志（東京大学総合文化研究科）、巻田　晴香（同志社大学心理学研究科）、三重　雛子（追手門学院大学心理学研究科）、山田　尚武（日本大学法学部新聞学研究科）、渡壁　政仁（東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻社会心理学専門分野）

・準会員　達　椋介（金沢工業大学情報フロンティア学部心理情報学科）

退会

桑原　裕子、高野　陽太郎

自動退会　なし

所属変更

高林　久美子（明治学院大学）、竹橋　洋毅（奈良女子大学文学部准教授）、高橋　幸子（専修大学）、松本　良恵（西南学院大学人間科学部心理学科嘱託実験助手）、李　楊（名古屋大学情報学研究科価値創造研究センター）、安達　菜穂子（広島大学ダイバーシティー研究センター連帯研究員）、吉田　悦子（放送大学教養学部）、桃木　芳枝（東京農業大学名誉教授）、古川　善也（広島大学人間社会科学研究科助教）、山田　学（株式会社NTTドコモ）、小城　武彦（株式会社日本人材機構代表取締役社長）、戸谷　彰宏（広島大学大学院教育学研究科/日本学術振興会特別研究員 PD）、平岡　大樹（福井大学子どものこころの発達研究センター/日本学術振興会特別研究員）、蕪木　太加彦（葵の園新潟寺尾　通所リハビリテーション生活支援員）

****

『社会心理学研究』掲載（予定）論文

第 36 巻第 2 号

【原著論文】

梅谷凌平・後藤晶・岡田勇・山本仁志　公正世界信念がアップストリーム互恵的協力に与える影響の検討

古橋健悟・五十嵐祐　援助要請における援助者の切り替え方略：援助者数が援助要請者のストレスに及ぼす影響

【資料論文】

白岩祐子・栗本真奈・唐沢かおり　形見の意味と故人との継続する絆

****

編集後記

日本国内で新型コロナウイルスの影響が本格化して半年が過ぎ、日々新たな感染者を出しながら、世間の人々は少しずつ活動量を増やしつつあります。9 月の 4 連休もものすごい人出であったと報道されましたし、後期授業は基本対面でという大学も少なくないようです。順応なのか適応なのか、慣れなのか我慢の限界なのか、働いているこころは同定できませんが、良くも悪くも半年前とは違った生活、いわゆる「ウィズ・コロナ」の生活様式が形成されつつあります。学会活動という狭い範囲においても、Web セミナーやオンライン研究会などが活発に行われるようになりました。私自身も参加してみましたが、これはこれで面白いかもと感じています。ただ、弊害がでてくるのはこれからかもしれません。個人的にはお酒の量が格段に減りました。あ、それは良いことか。

（藤島喜嗣・広報担当常任理事）